

## 子どもたちと端材

相田隆司 / 東京学芸大学 美術科 助教授

毎週火曜日は小学校に授業参観に行く日だ。今日もその日だった。休み時間の図工室には子どもたちがたくさんやってきて電ノコの前にズラリと行列し、行儀よく自分の順番が来るのを待っている。子どもたちはベニア板の端材を思い思いに切って、めいめい作りたいものを作っていた。大きな段ボール箱に入れられたいろいろな大きさや形の端材は子どもたちの想像力をかき立てるのだ。そういえば、以前参観した別の小学校ではやはり端材をひたすら磨くという活動が子どもたちの間で大流行していた。1000番のヤスリで磨いている真っ最中の子どもの端材を見せてもらったが、その木片は黒光りし特別なアウラを発散していた。子どもたちは、「端材=材料のひとつ」というおおざっぱな括りに到底おさまりきらない、材料が持つ物質性を超えたなにかを見出そうとしているかのようにさえ見える。彼らはきっとモノに固有性を与え意味づけることで己を確認し意味づけていくのだ。そういえば“木霊”という言葉がある。端材にもきっと“みえない”何かが宿っており、その“みえない”何かに向かって子どもたちは語りかけているのかもしれない。いま、子どもたちの周囲から急速にこの“みえない”ものが失われている。私だけの物語。私だけの関係。そんな世界とのみえないけれど大切な関わりの存在を子どもたちは求めているように思えてならないのだ。



相田先生の専門は美術科教育。今日の子どもの像を意識した題材研究、こどもの表現と経験をめぐる考察など。  
詳細は、美術科web参照>> <http://www.u-gakugei.ac.jp/%7Ebijutsu/teac/teac01.html>



<写真上> 机いっぱいの段ボールに、太い線、細い線、なみなみの線、速い線、点々の線…など、色々な線を描いていく。  
<写真下左から> わらを束ね、その端に絵の具をつけて描く。／普段道に落ちているような枝も、この図工室では立派な制作素材だ。／みんな次第に動きが活発になってくる。／授業後に、意見交換をする雨宮先生とバーバラ先生、ニコラス先生。



## \* 図工の現場から \* 国分寺市立第一小学校

スウェーデンのイエーテボリ大学デザイン工芸校(HDK)の教員養成プログラムを担当する4名の先生方に、公立学校における第一線級の図画工作を実感させるべく、2006年4月19日に国分寺市立第一小学校を訪ねた。国分寺一小では、3年生の図画工作から図工専科の雨宮玄先生が受け持つ。見学したのは3年生、新学年なので、まだ2回目の図工室だそう。題材名は「線から生まれる絵」、ねらいは「様々な色や形の線の中から、自分なりのカタチを見つけ出し、絵をかくことを楽しむ」。授業の流れは、3~4人のグループで様々な線を大きな紙に描く。その後、その紙を分割し、生徒それぞれが、好きな部分を選んで、展開させながら絵を作り上げるというものである。その中でも様々な線を描かせるときの雨宮先生の紹介する道具が、筆だけでなく、様々用意されていた。①ブラシ②わら(束にして使う)③小枝などである。図工室を見回せば、小さな木切れまでも整理され「いつかの図工材料」として準備されている。スウェーデンからの来訪者たちも、その配慮された準備に感嘆していた。

日頃どこにでもあり、日常に埋もれていた小枝。図工室で見た小枝は、大切な造形素材となっていた。「埋もれていたモノをピックアップして活かすこと」雨宮先生の図工室にはデザインの基礎があった。(鉄矢)

